



馬耳東風

郷土の歴史的シンボルとしての「天守閣」は国内に一体いくつあるのだろう。城の本丸にひときわ高く築いた構築物で、戦後の復興期以降、シンボルとしてあちこちに建てられたものも含めてどうやら80位のような。地域の看板的存在として、どこでも住民の意気込みが感じられる。おらが町のおらが城だ。建築当初は、戦闘における指令の中核であったが、関が原の戦後は、権威の象徴として機能した。今や城跡は公園化されて多角的に機能する。明治維新で封建体制の物証としての城は、どんどん解体され当時40残されたが、現在江戸時代から残っているものは12基となり、当然ながら決まって木造である。代表的な白鷺城の別名を持つ世界遺産の姫路城は、貞和2年(1346)に赤松貞範が築城したのに始まり、池田輝政が完成した。また、松山城は加藤嘉明によって築城着手されたが、天守閣が雷火で焼失、安政元年(1854)に再建された。松本・犬山・彦根・姫路・松江の5城は国宝に、他の7城は重要文化財に指定され、固有の歴史を刻みながら今に息づいている。天守閣の多くは、鉄筋コンクリート(RC)造りの復興天守や模擬天守が多く、そろそろ寿命を考える時がやって来たことだ。かつて関東を支配した小田原城は、先般復興補強工事を終えてリニューアルオープンし人気を博している。天守閣は石垣で築かれた天守台の上に建ち、多重多層で瓦葺とするのが基本である。先般の熊本地震で石垣が崩れ、あわや倒壊かと気をもませた銀杏の大木で有名な熊本城の天守閣は、西南戦争で西郷軍に攻められ炎上した

外観が、昭和36年(1961)にRC工法で造られた復興天守だ。巨大地震に耐えた角石垣の堅固さは古い匠技を見せ付け、人々に力強い感銘を与えた。地盤が軟らかく扇形に積み上げたこれほど石垣の発達した城は、日本独特の景観を呈し他に例をみない。構造上、水はけもよく崩れにくい構造だ。

木曾川は、長野県の中部、鉢盛山に発源し長野・岐阜・愛知・三重の4県を流れ、王滝川・飛騨川などの支流を合し伊勢湾に注ぐ長さ227キロメートルの大河である。この中流に位置し白帝城の異名を持つ「犬山城」は、木曾川沿いの小高い山の上に建つ後堅固の城で、天文6年(1537)織田信康により移築された現存最古の建築である。交易、政治、経済の要衝であり攻防の要となった。天守閣の美しさは、荻生徂徠が李白の「朝辞白帝彩雲間」の七言律詩を引用し、「白帝城」とたたえたほどで崖下に「名勝木曾川」の碑が立っている。歩くとぎしぎし鳴る廻縁高欄の天守閣の望楼からは濃尾平野が一望でき、雄大な木曾川の向こう側は岐阜県になる。まさに絶景だ。

また、朝霧にそびえる「越前大野城」は、幻の天空の城として名高い。石垣は野面積みで粗雑に見えるが大変堅固で、雲海に包まれると復興天守閣が浮かんで見える。時期・時間・気象の出現条件も開示、放射冷却現象のようだ。また、「備中松山城」や「竹田城跡」も天空の城となることで知られる。どの城も生活に根付き手厚い愛着と誇りと自信のなかで守られている。まさに、郷土愛のお手本なのだ。登閣の眺望はまさに醍醐味そのものである。(柏)